

北海道において麻の試作、栽培がはじめられたのは南拓便時代のことである。この時期の農業は移住者の生活の自給自足性と満す産物に加えて授産産業として利益をあげることでできるものの栽培が追求された。

一方この時期、南拓便は本道南拓にあたって助言指導のために南拓便顧問を海外から招いた。麻の試作栽培はこれらの助言指導によるところが大きかったといわれている。

今報告は南拓期の麻の栽培生産へのいきさつと移住者達とのかかわり、および南拓便顧問の指導について同時期の資料から調査をすすめたので報告する。

方法： 明治期特に南道期の行政資料である北海道所蔵公文書、南拓便事業報告、南拓便日誌、殖民公報、各市町村史を資料として調査をすすめた。

結果： 北海道の麻の栽培は南拓便が明治4年に下野園から種子及び技術者を雇い試作をはじめたのに始まる。更に授産産業の一つとして亜麻の栽培をすすめたのは南拓便顧問トーマス・アンチセル（アメリカ）の進言によるところが大きかったことが判明した。アンチセルは「アンチセル大野ノ儀ニ付進言」「アンチセル亜麻製方ノ進言」等と申告、南拓便もこの進言に対し対応している状況が公文書から推察できる。

一方、移住者の漁民は低価格の漁網の必要性に切迫していたこと、授産作物として地味が適していたことと背景として麻の生産がすすめられていたことである。